

# 《3》 横浜市民の「暮らしやすさ」と「つながり」

## 「少子・高齢化社会における大都市コミュニティの暮らしやすさに関する調査研究」から

### 1 はじめに

市民の「暮らしやすさ」を、行政サービスを通じて実現することは、行政の大事な役割である。では、市民は何をもって「暮らしやすさ」を実感するのだろうか。「暮らしやすさ」をわかりやすく示すことができれば、行政に携わる我々にとっては、どのようなことを目指した施策が求められているのかを考えやすくなる。その手段として考えられることは、「暮らしやすさ」を「物差し」としての指標を用いて表現することである。

かつて、本市では暮らしやすさの指標化に取り組んだことがあり、その内容は、横浜市民生活白書「よこはまの暮らしやすさ」(平成13年11月発行)にまとめられている。この背景となったのは、当時から数多く実施されていた、いわゆる「住みやすい街」や「暮らしやすい街」をランク付けする調査だった。こうしたラン

キングにおける本市の順位は決して最上位ということはないにもかかわらず、現実には多くの人が暮らしの場として「横浜」を選択している。そこで、こうしたランキングには現れない横浜市ならではの「暮らしやすさ」があるのではないかと、ということ、指標化を試みたのである。

それから十年ほどが経過した。大きく社会構造が変化しつつあり、現在は時代の転換点にあることがしばしば言われている。本市においても、市民意識調査の結果からは市民の間に広まる生活への不安感が窺われ、統計調査からは少子・高齢化の進行を現実の数字から実感し得るようになってきている。

そこで、政策局政策支援センターでは、この「暮らしやすさ」を調査研究のテーマに据え、平成22年度に「少子・高齢化社会における大都市コミュニティの暮らしやすさに関する調査研究」(以下、「暮

らしやすさ調査」という)を実施した。改めて、この時代に市民の感じる「暮らしやすさ」を考えるにあたってのスタートであり、基礎データとなる調査である。

本稿では、この調査の結果の中から、今号の特集に沿った形で、市民の「つながり」に着目して考察してみたい。(注1)

### 2 調査の概要

この調査では、横浜市民5千人を対象とした郵送による調査、郵送調査の対象者からのインタビュー調査、加えて市内外の事例調査を実施した(表1)。

平成13年度に暮らしやすさ指標を検討した際には、利便性など、地域環境の特性のよくな「地勢面」に着目する部分が大きかった。また、「暮らしやすさ」を考える上では、今号で特集している、「ソーシャルネットワーク」(人との

付き合い方や関係性)についても欠かせない要素となるだろう。

今回の暮らしやすさ調査は、この二つの要素だけでなく、「各個人の生活基盤」(収入、住まい、家族関係)と「個人の価値観」(自尊心や社会一般への信頼感)とを要素に加

執筆  
唐澤 健  
政策局政策課担当係長

(注1)  
本調査研究の報告書は、共同研究先の財団法人地方自治研究機構のホームページ( [http://www.rilg.or.jp/004/h22\\_02.pdf](http://www.rilg.or.jp/004/h22_02.pdf) )に掲載されている。

### 1 調査概要

区分	調査名	調査方法	調査内容
調査1	横浜市民の暮らしに関するアンケート調査	アンケート調査	○調査対象：20歳以上の横浜市民5,000人(住民基本台帳による単純無作為抽出) ○調査内容：①市民が有するネットワーク、②他者への信頼感、③市民が抱える生活不安・課題、④生活状況の実態と意向、⑤暮らしやすさ、生活価値観、⑥回答者属性 ○調査方法：郵送による配布・回収。督促状付1回実施。 ○調査時期：平成22年8月 ○回収結果：2507票(回収率50.1%)
調査2	暮らしやすさに関するインタビュー調査	ヒアリング調査	○調査対象：アンケート調査に回答した横浜市民22人(参加希望者数262人、事前調査発送数123人、参加依頼数32人)、外国籍市民7人(中国籍3人、フィリピン籍2人、韓国籍1人、台湾籍1人) ○調査方法：アンケート調査回答者でインタビュー調査への参加を希望する人のなかから、ライフステージ、クラスター等を加味して選定。外国籍市民については、横浜市都市経営局国際政策課等を通じて選定 ○調査時期：平成23年1～2月 ○実施回数：7回(うち外国籍市民対象2回)
調査3	市内関係団体調査	ヒアリング調査	○調査対象：「暮らしやすさ」形成に取組む市内地域コミュニティ組織、NPO、ボランティア団体等 5事例 ○調査内容：「暮らしやすさ」形成に向けた取組の状況、形成に向けた地域条件・課題等 ○調査方法：書面調査及び調査担当者(事務局)の訪問聴取調査 ○調査時期：平成22年10～11月
調査4	先進事例調査	視察調査	○調査対象：「暮らしやすさ」形成に係る団体等 2事例 ○調査内容：①取組状況、②問題点・課題、その他 ○調査方法：調査担当者(事務局)による訪問聴取調査 ○調査時期：平成23年2月

え、一歩踏み込んだ形で「暮らしやすさ」を考慮することを試みているのが特徴である。

### 3 郵送調査

郵送調査では、住んでいる地域について、次いで、家族・親族との関係性、家族・親族外の人との関係性、地域や社会に貢献する活動、最後に個人の価値観を尋ねる、という構成で質問票を作成した。郵送調査の結果のうち、主に「つながり」に関わる内容から一部を紹介したい。

#### ① 地域とのつながり

自分の住む地域について、「近所には顔なじみの住民が多いほう」なのかという問に対し、「そう思う」(13・4%)と「どちらかというと思う」(27・7%)とを合わせた「顔なじみが多い」と考える層(41・1%)は、60代以上で5割前後なのに対し、25歳〜34歳では2割台だった。ライフステージ別に見ると、40歳未満の夫婦のみの世帯は「そう思う」とする回答が1・8%と極端に低く、地域とのつながりが最も希薄な層だと言える。

自分の住む地域に「困ったときは互いに支えあう雰囲気

がある」のかという問に対し、「そう思わない」とする回答(13・6%)は、他の世代が1割台前半以下であるのに対し、25〜34歳の年代は2割を超えている。また、住居の形態別に見ると、「そう思わない」と「どちらかというと思う」(17・0%)とを合わせた層(30・6%)は、持家・借家ともに一戸建てで25%未満だったのに対し、共同住宅の層は3割前後を上回り、特に民間アパート、賃貸マンションは49・2%と半数近くに及び、住居形態でも差が見られる。

#### ② 情報交換や相談の相手

日ごろの「世間話・情報交換の相手」を、同居や別居の「家族」とする回答は、世代による差があまりなかった。これに対し、「親戚の人」(25・7%)という回答は60代以上で3割を超えるのに対し、20〜40代では1割台となっており、家族外だが血縁のある親族との関係性は、年齢の高い世代ほど強い。

また、「インターネットを通じて知り合った人」(3・0%)は、50代以上では1%台以下であるのに対し、20代前半で1割を超えるなど、若い世代ほど割合が高い。また、就業

形態別で、派遣社員と学生で1割を超えているのが目立つ。この設問は複数回答となっており、4分の1近くが5種類以上(23・2%)回答していたが、単身(40〜64歳)と高齢子どもなし(65歳以上)については、1〜2種類(全体では29・9%)がそれぞれ、46・5%と45・4%と半数近くを占め、なし(1・5%)もそれぞれ、7・9%、9・1%と、ちよつとした話をできる相手がいなかったり、いたとしても話し相手の範囲が限られている傾向が見られる。

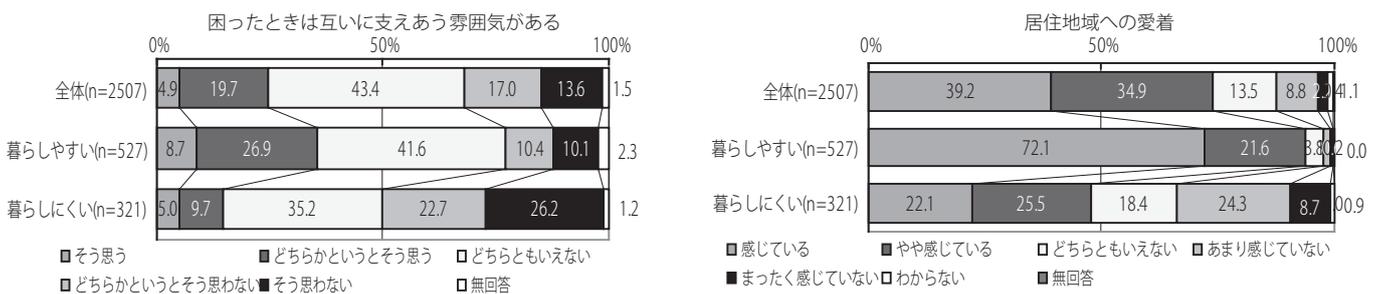
一方、「困りごとの相談相手」になると、世間話・情報交換では2位だった「仕事で知り合った人」(20・2%)は5位となり、同居の家族(76・1%)、別居の家族(44・7%)、親戚(23・3%)、と血縁関係者が上位の3つを占める。やはり、単なる世間話よりも踏み込んだ話では、血縁関係のある者が主な相談相手となるようである。また、相談相手として、5種類以上(8・1%)挙げられる割合が減少し、2種類(30・4%)が最も多くなる。相談相手が「なし」(2・8%)とする人は、単身(40〜64歳)で9・6%おり、就業形態別では派遣社員で14・3%いるのが目立つ(他の就業形態では5%を下回る)。

「経済的に困った時の援助」と「家庭内の問題の相談」について、自分自身や同居家族だけで対応できない場合の対応についての質問に対し、「公的な機関や制度を利用する」(それぞれ29・6%・16・3%)との回答は、「別居の家族や親戚に頼む」(49・1%・52・7%)に次いで高くなっている。同居・別居を問わず家族だけでは解決できないような問題については、まずは地域の人や友人に頼むのではなく、直接、行政をはじめとした公的機関を頼りにするという傾向が見られる。特に、公的機関や制度の利用は、高齢子どもなし(65歳以上)(36・4%・25・0%)の割合が高い。高齢単身世帯が増加し続ける中、現状のままでは、将来、行政需要が更に増加していくことが想定される結果となった。

#### ③ 「暮らしやすい」市民と「暮らしにくい」市民

ここで、「現在の生活全般について」の質問に、「暮らしやすい」(21・0%)と感じていると回答した「暮らしやすい」層の市民(527人)と、「どちらかといえば暮らしにくい」(7・8%)、「暮らしにくい」(5・0%)と回答した「暮らし

図1 居住地域における互いに支えあう雰囲気の有無と居住地域への愛着



しにくい」層の市民(321人)のそれぞれについて、クロスでの集計の結果を用いて「つながり」との関係を見てみる。

居住地域に「困ったときは互いに支えあう雰囲気がある」かどうかという設問について、「そう思う」と「どちらかというと思う」とを合わせた肯定派は、暮らしやすい層が35・6%、暮らしにくい層が14・7%なのに対し、「どちらかというと思う」と「そう思わない」と「そう思わない」とを合わせた否定派は、前者20・5%、後者48・9%だった。また、居住地域への愛着について、肯定派は、前者が93・7%、後者47・6%だった(図1)。

自分自身や同居家族だけで問題に対処できない場合について尋ねた質問について「頼める人がいない」とする回答は、前者1・2%台に対し、後者は10〜20%にもなった(図2)。

図2 自分自身や同居家族だけで対応できないとき

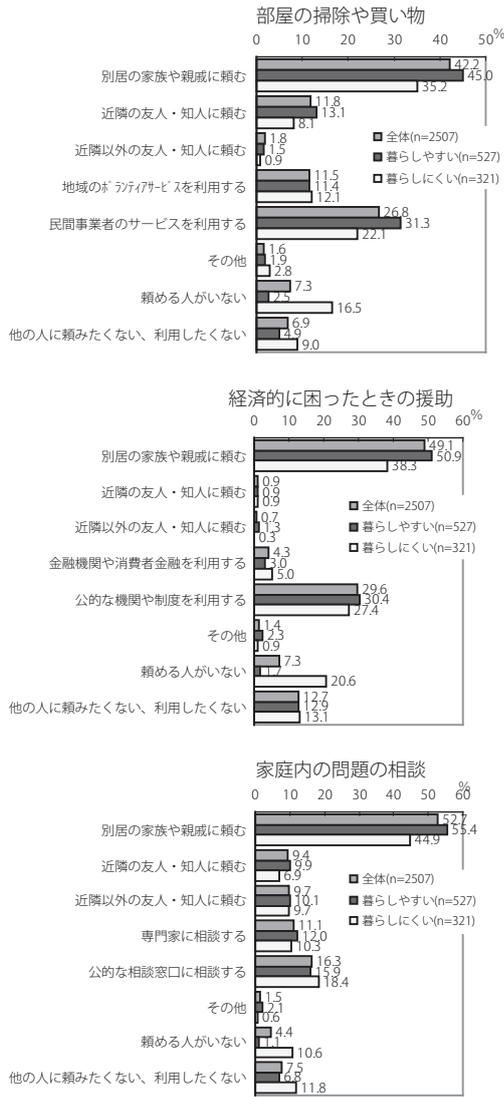
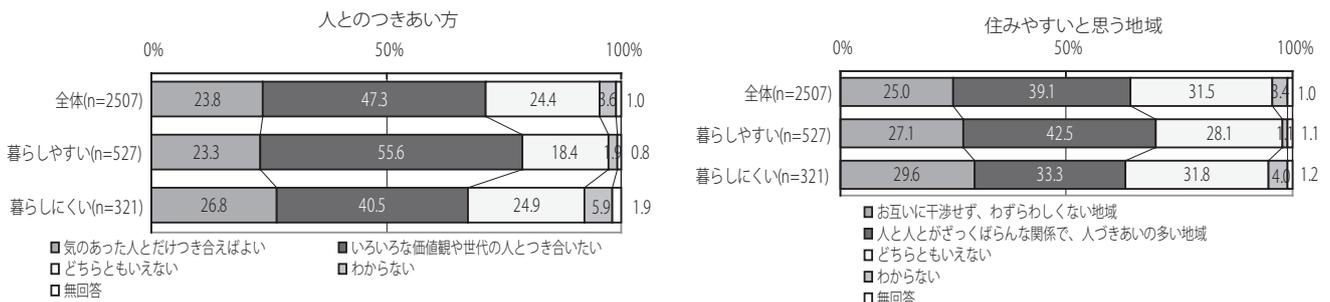


図3 人とのつきあい方と住みやすいと思う地域



「お互いに干渉せず、わずらわしくない地域」か「人と人がざっくばらんな関係で、人づきあいの多い地域」かの二者択一」といった価値観を問う設問には、極端な差異は見られない(図3)。

さらに、「暮らしやすい」市民と「暮らしにくい」市民とでは何が異なっているのか、「判別分析」を実施した。判別分析は、質問への回答から、満足層と不満足層や賛成派と反対派などを分けている境界がどのような要素であるのかを分析するものである。それぞれの要素が正・負のどちらの方向にどのくらい強さで作用しているのかを知ることができる(図4)。

「暮らしやすさ」と「暮らしにくさ」を共に促進する要因として高い数値が見られたのが、住居に関する回答だった。「家賃や建て替えなどの問題がなく、安心して住み続けられる」かどうか、「住まいが快適である」かどうかといった設問である。そして、両者を促進する、もう一点の注目すべき要因となっていたのが、価値観に関する「自分が努力すれば報われる」と思うかどうかを問う設問への回答だった。

住居の問題という外的要因に加え、現代の社会では必ずしも簡単に肯定し得なくなっている「自分が努力すれば報われる」か否かという個人の価値観に関する内的要因が、暮らしやすさにも大きく影響することが、今回の調査結果から明らかになっている。

#### ④「暮らしやすさ」から見た市民像

調査結果の分析にあたっては、回答傾向に近いグループを分類する「クラスター分析」を実施し、回答者全体を8つのクラスター（グループ）に分け、それぞれのクラスターに当てはまる「市民像」を描いた（図5）。

最も人数が多いのが、第2クラスター（2C、以下同じ。）（28・6%）、次いで8C（25・4%）である。2Cは、30〜40代が中心で、学齢期の子どもの割合が高め。他者との関わりに積極的で、他者への信頼感が高く、社会貢献に対する意識が強い。8Cは、子が全員独立した親と親や祖母と同居する40歳未満の割合が高く、悩みや困りごとがない割合が4割ほどになっている。

2Cと同じく、学齢期の子どもの割合の高い5C（13・6%）は、暮らしやすい人の割合が低く、2Cと対照をなしている。他者への信頼感が低く、自分自身にも社会に対して評価が低い。暮らしやすさは感じているものの、他者との関わりを積極的に持とうとしていないのが1C（13・0%）と6C（6・7%）である。1Cは、社会

貢献活動をしたいたいと思わない割合が3分の2を占めるなど、他者との関わりには消極的だが、暮らしやすさを感じている。子が全員独立した親や夫婦のみの世帯、60歳以上の割合が高い。6Cは、75歳以上の割合が特に多く、他者との関わりに消極的で、困った時の援助も頼みたくない意識が強く、社会貢献活動への参加意欲も低い。

そして、「暮らしやすい」割合が低いのは、先に挙げた5Cのほか、3C（2・5%）と7C（3・2%）である。自分の居場所がないと感じている割合（全体では6・3%）が、3Cは3割超、7Cは5割超と、目立って高くなっているほか、自分自身への評価が低い。

最後に紹介する4C（7・0%）は、これまであまり意識されてこなかった新しい市民像である。ひとり暮らしや夫婦のみの世帯が中心で、家族に相談したり、援助を求めるといった割合が低く、公的機関や民間サービスを利用するという割合が高い。相談ごとの相手として、仕事で知り合った人や趣味・ボランティア活動の知人を挙げる割合が高く、社会貢献活動への意欲を持ち合わせている。今回特集している

「ゆるやかなつながり」を体現している（しようとしている）市民像と言えるのかもしれない。

#### 4 グループインタビュー

郵送調査への回答者のうち、インタビュー調査に協力した11名の回答があった方は、事務局の予想を上回る262人。この中から22人の方々にご協力いただき、グループインタビューを5回実施した。参加者の多くは、「暮らしやすい」と回答している方々で、40〜50代が7割という構成だった。インタビューは、特に、近隣・地域とのつながりに注目して実施した。以下のような話を聞くことができた。

○日ごろから交流がある相手としては、職場や趣味など、それぞれが持つ様々なネットワークが多岐にわたっているが、近隣が対象となるのは、子育て層のいわゆる「ママ友」のつながりや定年退職後のつながりがあった。こうした行動範囲がある程度限定される層は、近隣・地域との関係に向き合うことがどうしても必要になるのである。

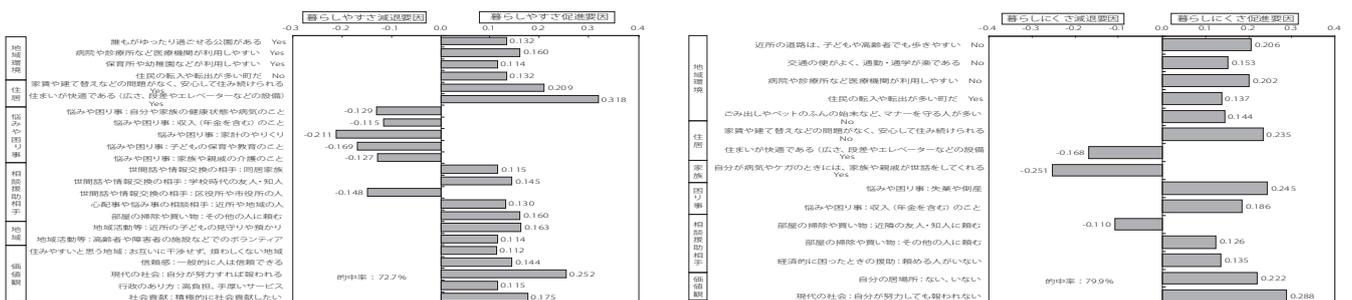
○居住形態による違いも見られた。戸建の住宅地においては、自治会・町内会の活動が

一定程度根付いていることもあり、近隣同士で一定のつながりがあり、高齢化が進む中でも親世代の付き合いが子世代に引き継がれる動きもあるようだ。

集合住宅の場合、近隣住民の顔や名前を知らなくても不自由なく生活しており、ゴミ集積場所を巡るトラブルのように戸建住宅地で問題となりがちなことに対しては、大家や管理人に任せて自分に関わらない、というスタンスを取っている様子が垣間見られた。それでも、特に分譲の集合住宅であれば、管理組合・理事会の活動や町内会などの活動を輪番で担当することで居住者同士のつながりが形成されることがある。だが、やはり、集合ポストや自室に表札を出さないことに象徴されるように、戸建住宅と比べて近隣とのつながりは希薄になりがちである。

○近隣・地域との日常的な付き合い方については、多くの場合、差し障りのない时候の挨拶のみということだった。職業の話題など、挨拶よりも立ち入った話題についてはなかなか尋ねられない、という話が多く聞かれた。全体的な傾向として、近隣の人々と全く付き合いがないこと自体を

図4 判別分析の結果―「暮らしやすさ」と「暮らしにくさ」とを分ける要素



よしとしているわけではないものの、「自分のことを相手に知らせることはせず」「トラブルになることのない程度に付きあう」ことを望んでいる。そこでは、「強いつながり」は決して求められておらず、「他愛のない会話を気分よくできる程度のつながり」で十分だと考えられているようである。

○家族の問題や経済的問題のようなプライベートな問題については、誰にも相談しないか、相談しても家族内で対応しようとし、家族で対応できないとすると、次の段階で、すぐに公的機関・専門機関を相談先とし、近隣・地域が問題解決に役割を果たすケースは少ないようである。

## 5 外国籍市民から見た日本人の「つながり」

今回の調査では、外国籍市民を対象としたグループインタビュー調査を実施した。平成22年国勢調査によると、市内には5万人超の外国籍市民が暮らしているが、一般的な調査だけでは全体の調査結果の中に外国籍市民の声が埋もれてしまう可能性があることから、外国籍市民ならではの考え方を考えるために、7人(中国籍3人、フィリピン籍2人、

図5 クラスタ分析の結果—暮らしやすさをめぐる8つの市民像



韓国籍1人、台湾籍1人)のご協力をいただいて実施したものである。インタビューで聞くことのできた話は以下のようなものだった。

○日本人は、なかなか自分自身のことを語ろうとしない、また、親しく付き合うようになるまで時間がかかる。

○外国人は家族・親族とのつながりに重きを置いている。自分は祖国の家族と頻繁に連絡を取り合っているのに、日本人の夫があまりに自分の家族と連絡を取り合わないことが不思議で仕方がない。

○子供が家に遊びにきたり、作りすぎた料理をおすそ分けした程度のこと、いちいち菓子折りをいただいてしまうなどしたため、恐縮して付き合いつづらなくなってしまうことがある。

にしているところがあるのではないか。

外国籍市民へのインタビューからは、客観的な視点に立つと、日本人の「つながり」がどのように映るのかわかる。それができて興味深い。「暮らしやすさ」や「つながり」を考えると、「示唆に富むものではないだろうか。」

## 6 おわりに

最近、「幸福度」指標が注目されている。平成23年末のブータン国王来日の際に同国の提唱するGNHが話題となった。国内に目を転じて荒川区のGAIをはじめ、自治体による「幸福度」の指標化が先行する中、国からも23年12月に内閣府によって我が国の幸福度指標の素案が示された。

本市でも、本稿で取り上げた暮らしやすさ調査の結果を基に、前回の指標策定から10年の時を経て、改めて「暮らしやすさ」の指標化を視野に置いた検討を進めようとしている。

市民の感じる「暮らしやすさ」を検討するにあたり、人と人との「つながり」の果たす役割が、重要な構成要素となることは間違いないだろう。